様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３７１０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０６８４

研究課題名（和文）解離の多次元アセスメントと心理援助法の開発

研究課題名（英文）A developmental study of screening for dissociation

研究代表者
舛田　亮太（Masuda, Ryota）

久留米大学・医学部・助教

研究者番号：３０５４７０５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：研究1では、大学生386名を対象に日常的解離尺度改訂版項目からなる質問紙調査を行った。結果、「没入・没頭」「健忘による情動対処」「非現実感」「うわの空」「疎隔感」の5因子49項目の改訂版尺度が作成され、ある程度の妥当性が確認された。研究2では、患者群150名に対して研究1の改訂版尺度を実施した。結果、精神的健康度の予測指標として非現実感、うわの空、疎隔感が有効な可能性が示された。研究3では、心的外傷体験が不明確な解離性障害4事例の心理検査について検討した。分析の結果、ロールシャッハ・テストと改訂版尺度による解離傾向は一致せず、解離に対する心理尺度と投映法の表現形は異なる可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：In study1, thirty eighty six undergraduates completed the questionnaire of revision of Normal Dissociation Scale which was constructed five factors, absorption, coping of temporary amnesia ,derealization,fantasy,depersonalization and Dissociative Experiences Scale (DES).As a result of analyses, the scale show good reliability and validity.In study 2,One hundred fifty acute psychiatric inpatients completed the questionnaire of revision of Normal Dissociation Scale and DES.As a result of analyses, it was indicated that derealization , fantasy, depersonalization predict positively GHQ.In this study3, It was examined characteristic findings of psychological assessment for four patients with dissociative identity disorder who had ambiguous traumatic experiences.As a result, revision of Normal Dissociation Scale was correlated positively with dissociative tendency of Rorschach test. On the other hand, DES wasn't correlated clearly that of Rorschach test.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：解離　日常的解離　病的解離

１．研究開始当初の背景

解離は、DSM-Ⅳ-TR(APA,2000)では「解離性障害」として病的体験がまとめられている。一方、一時的な空想、没頭、離人感、自動行動等、日常生活を円滑を送るための非病理的～軽度の解離体験も存在する。舛田(2008)は、青年期に比較的高頻度に生じる、非病理的から軽度の解離を「日常的解離」と命名し、「意識・記憶・同一性等の遮断・喪失が一時的・限定的で、本人に自覚があり、ある程度統制性のある解離機制/体験」と定義した。

研究代表者は健常者における解離が、病的か非病理的な日常的解離かの判別法を考案してきた。しかし近年は、同じ病的解離でも内容が全く異なること、また解離の内容に応じた効果的な援助法の必要性が主張されている。　以上から本研究では、「解離の多次元アセスメントと心理援助法の開発」を研究目的とする。筆者が開発した日常的解離尺度を改訂し、これまでより広範囲な対象者と心理援助法の選択（力動的心理療法、認知行動療法 etc）へと調査範囲を広げ、解離に対するエビデンスに基づいた心理査定・援助法を開発する。

２．研究の目的

本研究では、「解離の多次元アセスメントと心理援助法の開発」を行うことを目的とする。研究目標は以下の通りである。

1) 日常解離尺度改訂版作成と妥当性の検討
2) 日常的解離尺度改訂版による患者群の解離傾向の明確化
3) 解離性障害患者への日常的解離尺度改訂版とロールシャッハ・テスト（以下ロ・テスト）の実施、および援助法の選択

２．研究の方法

研究 1.1

舛田(2008)の日常的解離尺度は、4 因子構造 22 項目という結果を示した。しかし、尺度項目の範囲は不十分で、高い妥当性を示すには更なる尺度精緻化の必要性が示された。

従って、研究 1 では日常的解離尺度改訂版の作成し、因子構造、基準関連妥当性、再検査信頼性、精神的健康との関連の検討を行う。研究 2 では、研究 1 で作成した日常的解離尺度改訂版を用い、健常群と患者群の解離の異同について検討する。研究 3 では、日常的解離尺度改訂版とロ・テストを用いて、心的外傷体験が不明確な成人の解離性障害患者の心理検査特徴について検討を行う。

研究 1.1　改訂項目の選定

調査協力者：大学生、大学院生、高専生計 386 名（男性 76 名、女性 310 名、平均 19.89 歳、SD1.206）

手続き:以下の質問紙を一斉配布・回収

1 日常的解離尺度(舛田,2008) 22 項目 5 件法

2 日常的解離尺度項目改訂版項目 81 項目

3 日常的離人尺度(舛田,2006)10 項目 5 件法

研究 1.2　因子構造の検討

調査協力者：大学生、大学院生、高専生計 564 名（男性 128 名、女性 436 名、平均 19.95 歳、SD1.196）使用尺度は、研究 1.1 で作成された日常的解離尺度改訂版

研究 1.3　妥当性の検討

調査協力者、調査時期：研究１.1 と同じ。

手続き:以下の質問紙を一斉配布・回収

1. 研究 1.1 で作成された日常的解離尺度改訂版
2. 解離性体験尺度(DES；田辺,1994)28 項目

なお再検査信頼性を確認するための倫理的配慮として、アルファベットと数字からなる 4 桁の任意のパスワードを回答者に設定させた。初回調査後の１か月後に１を実施した。

研究 1.4　精神的健康との関連

調査協力者：研究 1.1 と同じ

使用尺度:①研究 1.1 で作成した日常的解離尺度改訂版、②精神的健康調査票（GHQ），Goldberg(1972)：中川・大坊（1985）28 項目
手続き：項目の多さを配慮し、質問紙調査は 2 回に分けた。１回目は①の回答、４桁の数字とアルファベットからなる任意のパスワード設定、２回目は②の回答、同じパスワードを記載させ、回収後に両者を一致させた。

研究 2

調査協力者：精神科外来・病棟患者 150 名
手続き：研究協力の同意取得後、以下実施。研究１で作成した日常的解離尺度、解離性体験尺度（DES：田辺,2004）からなる質問紙調査を行った。患者群のうち、知的障害、器質性精神病（薬物依存含む）、てんかん、ナルコレプシー、アルコール依存を除いたところ、患者群は 135 名（平均 33.67 歳,SD14.79,男性 42 名,女性 93 名）となった。

研究 3

心的外傷体験を伴う成人の解離性障害患者のロ・テストについては、青木(2009)により、過剰な情報処理努力、否定的思考、無生物運動反応の多さ、形態水準の低さなどの特徴が報告されている。しかし、心的外傷体験が明確でない場合の成人事例、更には思春期事例の解離性障害特徴は未だ報告が少なく、今後の事例累積が必要である。研究 3 では、成人男性 2 名、成人女性 1 名、思春期女性 1 名の計 4 例を通じて、外傷体験が不明確な解離性障害の心理検査特徴について検討する。

4.研究成果

研究 1.1

因子構造の検討:上記３尺度の計 113 項目について因子分析（主因子法,プロマックス回転）を行った。結果、累積率 42.82%となった。第１因子に祈りや没入・没頭といった項目に正の高い負荷量を示したため、F1「没入・没頭」と命名した。第 2 因子には健忘と対処といった項目に正の高い負荷量を示したため、F2「健忘による情動対処」と命名した。第 3 因子には、離人感の中の非現実感に関する項目に正の高い負荷量を示したため F3「非現実感」と命名した。第 4 因子には、会話、授業場面にうわの空になる等の項目に正の高い負荷量を示したため、F4「うわの空」と命名した。第 5 因子には、離人感の中の自分をみつめる他の視点に関する項目に正の高い負荷量を示したため、F5「疎隔感」と命名した。以上から日常的解離尺度改訂版は、5 因子計 49 項目(α=.89)、F1「没入・没頭」16 項目(α=.84)、F2「健忘による情動対処」9 項目(α=.84)、F3「非現実感」8 項目(α=.85)、F4「うわの空」11 項目(α=.82)、F5「疎隔感」5 項目(α=.82)となり、全ての因子において、高い内的一貫性が認められた。

研究 1.2

因子構造の再確認：日常的解離尺度改訂版の因子構造を確認するために、Amos を用いた。日常的解離からの５因子の標準化係数は、F1「没入・没頭」、F2「健忘による情動対処」、F3「非現実感」、F4「うわの空」、F5「疎隔感」の順に、.437,.269,.818,.397,.633 となった。以上から、Ｆ3「非現実感」F5「うわの空」が日常的解離の構成概念に大きく寄与していることが示された。

研究 1.3

再検査信頼性の検討：２回の調査に回答し、パスワードが一致したのは 564 名中、386 名（男性 76 名、女性 310 名、平均 19.89 歳、SD1.206）であった。日常的解離尺改訂版 5 因子 F1「没入・没頭」、F2「健忘による情動対処」、F3「非現実感」、F4「うわの空」、F5「疎隔感」について、１回目、２回目の因子得点間で相関分析を行った。相関係数は順に、r=.830,.769,.697,.763,.687 となり、正の有

意な相関がみられた（Table１参照）。

Table1　各因子の再検査信頼性　** p<.001

	再検査との相関（N=386）
F1「没入・没頭」	.830**
F2「健忘による情動対処」	.769**
F3「非現実感」	.697**
F4「うわの空」	.763**
F5「疎隔感」	.687**

基準関連妥当性の検討：日常的解離尺度改訂版と DES を共に回答したのは、564 名中、467 名（男性 100 名、女性 367 名、平均 19.91 歳、SD1.213）であった。両尺度得点間で、相関分析を行った。相関係数は順に、r=.475,.152,.498,.509,.415 となり、正の有意な相関がみられた(Table2 参照)。5 因子全てが再検査、DES ともに正の有意な相関を示し、舛田(2008)の課題とされた再検査信頼性、基準関連妥当性がある程度確認された。

Table2 各因子と DES の相関係数　** p<.001

	DES（N=467）
F1「没入・没頭」	.475**
F2「健忘による情動対処」	.152**
F3「非現実感」	.498**
F4「うわの空」	.509**
F5「疎隔感」	.415**

研究 1.4

GHQ の平均値を算出した結果、GHQ 合計は 25.52(SD11.78)、身体的症状は 8.07(SD4.23)、不安と不眠は 7.73(SD4.22)、社会的活動障害は 6.89(SD2.72)、うつ傾向は 2.83(SD3.81)となった。次に Amos によるパス解析を行った。健忘による情動対処は、身体的症状、社会的活動障害、うつ傾向に、有意な負のパスを示した。その一方で、没入・没頭は不安と不眠に、非現実感は不安と不眠、社会的活動障害、うつ傾向に、うわの空は GHQ4 因子全てに、疎隔感は身体的症状、不安と不眠、うつ傾向に有意な正のパスを示した。以上から、非現実感、うわの空、疎隔感が精神的健康を広範囲に抑制する可能性が示された。

研究 2

患者群の検討：分析の結果、舛田(2008)の健常群(N=145)が DES 平均 18.25(SD11.42)であるのに対し、患者群(N=134)は 20.43(SD 18.66)となり、同程度の得点となった。次に cutoff 基準である 30 点以上示したものを病的解離群として抽出した。結果、29 名（男性 10 名、女性 19 名.平均 27.24 歳）が分析対象となり、病的解離群の DES 平均は 48.21（SD17.76）と高い値を示した。

次に病的解離群を DSM-Ⅳ-TR の診断分類に沿って、不安障害群（N=17）、気分障害群（N=5）、精神病群（N＝7）の 3 群に分け、この 3 群の DES 総点を比較した。3 群の DES 得点は　不安障害群が平均 45.49(SD20.18)、気分障害群が平均 47.52(SD11.34)、精神病群が 55.31(SD14.84)となったが、有意な差は示されなかった。日常的解離尺度改訂版については、舛田(2011)の健常群(N=386)の結果と比較した結果、３群ともうわの空の傾向が高いことに加え、①不安障害群は非現実感と疎隔感が高い、②気分障害群は、健忘による情動対処が少なく、没入・没頭と疎隔感が高い、③精神病群は健忘による情動対処が少なく、非現実感と疎隔感が高い、ということが示された。以上から、これらの 3 因子が精神的健康の予測指標となり得る可能性が示された。

研究 3

舛田・前田(2009)で検討した成人Ａは、長期間の全生活史健忘を繰り返した事例である。健忘の理由について「特に気にならない」と治療を自己中断した。舛田・前田(2010)の成人Ｂは解離性の意識消失発作を繰り返した事例である。意識消失の理由について、当

初は心理面接の動機づけが高かったものの、途中より「(解離については）考えたくない」と述べ、治療は複数回で終了し Masuda&・Maeda（2011）の成人Cは Fail を多く表出した。複雑な形が認知できなかった点は発達的偏りによる可能性が残されたが、舛田・前田(2009,2010)と同様の傾向を示した。以上の成人３例からは、①ロ・テスト上では神経症水準～病理水準の量的、質的結果となるものの、解離尺度は低い得点となること、②意識消失や健忘を中心とした症状への自我違和感をもたないこと、③現実的な家族の金銭状況とは別に、「金銭的な苦労をかけたくない」という訴えが中心となり、福祉的支援が主題となること等の共通点が明確になった。

更に、これらの 3 例と舛田・前田(2013)の思春期女性Dを比較する。１）解離性体験尺度の高得点、２）描画の衝動性、３）ロ・テストでは形に関する説明には拘らず、色彩刺激の説明を避ける、という大きな相違点が見出された。これらは、思春期と精神病水準の両方要因による特徴が考えられ、更なる統制研究が必要である。また、知能検査結果による能力間の差異が、解離を促進している可能性も考えられた。今後は解離尺度とロ・テストだけでなく、知能検査法とのテスト・バッテリー結果を比較し、上述の福祉的支援と心理的援助を統合するといった援助仮説を検討していくことが重要であることが示された。

総合考察

本研究では、研究 1)日常的解離尺度改訂版の開発を行い、ある程度の妥当性を確認できたこと、研究 2)健常群、患者群ともに精神的健康度の予測指標として非現実感、うわの空、疎隔感が有効である可能性があることが示された。しかしながら、研究 3)ロ・テストの解離傾向と心理尺度上の高さは必ずしも一致しない、という結果となった。この問題は、尺度上の課題によるものか、投映法で表出される解離傾向と心理尺度上の解離傾向が必ずしも一致しない可能性の両者が残されている。この点は、他者に意識的に援助を求めるか否かという援助方向性の問題とも重なる部分であり、細かな検討を要する。従って今後も尺度改訂を進めるだけでなく、解離に対してより有用な心理援助につながることを踏まえた心理査定法の開発が重要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 12 件）

・口頭発表（4 件）

１.舛田亮太・前田正治　意識消失が認められた思春期女子のロールシャッハテスト－神経症水準から精神病水準への移行が疑われた一例　日本ロールシャッハ学会第 17 回大会 2013.11.2-3.花園大学　プログラム・抄録集,p44

２.舛田亮太：サブクリニカルな解離についての一考察　「解離の構造と治療について（企画:岡野憲一郎・舛田亮太）」シンポジウム 第 11 回日本トラウマティック・ストレス学会 福岡,クローバープラザ　2012.6.9-10 プログラム抄録集 P51

３.舛田亮太：父からの虐待で解離症状を呈した小学生男児の一例
第 11 回日本トラウマティック・ストレス学会 プレコングレス:子どものトラウマ事例検討会福岡,クローバープラザ 2012.6.8

4.Ryota Masuda& Masaharu Maeda Rorschach test for a female repeated loss of consciousness

In common points between three clients with unclear traumatic dissociative disorders. 20th International Congress of Rorschach and Projective Methods, Abstract book,130-131.19th-July,2011. National Youth Olympics Memorial Center Tokyo,Japan.

・ポスター発表（8 件）

1.舛田亮太・前田正治・大江美佐里・内村直尚　解離が精神的健康に及ぼす影響　―解離尺度と GHQ の比較―第 17 回日本精神保健予防学会東京学術総合センター 2013.11.23-24.

2.舛田亮太　改訂版日常的解離尺度の作成 3 ―下位因子が精神的健康に与える影響―
日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会
千葉,江戸川大学　駒木キャンパス,2013.10.12-13.論文集,p135

3.舛田亮太：改訂版日常的解離尺度の作成 2 ―再検査信頼性、基準関連妥当性の検討―
日本心理学会第 77 回　北海道,札幌コンベンションセンター/札幌市産業振興センター 2013.9.19-21.

4.舛田亮太・大江美佐里・前田正治:健常群と患者群の解離の比較　第 3 報
第 12 回日本トラウマティック・ストレス学会　東京,帝京平成大学　池袋キャンパス,2013.5.11-12.プログラム抄録集 P119

5.Ryota, Masuda, Masaharu, Maeda, Misari Oe, Naohisa, Uchimura. Subclinical dissociation in Japanese Adolescence.International Society For TraumaticStress Studies 27th Annual Meeting 2011,USA, Baltimore,November. 1-3,2011. Abstractbook,84.

6.舛田亮太　健常群と患者群の解離の比較-第 2 報-　第 64 回九州精神神経学会.2011.10.16.福岡国際会議場

7.舛田亮太　改訂版日常的解離尺度の作成-因子構造の検討-日本心理学会第 75 回大会発表論文集 p450.2011.9.15-17.日本大学

8.Ryota Masuda& Masaharu Maeda Rorschach test for a adolescence female in the Prodromal Phase of Schizophrenia with Dissociative symptoms.20th International Congress of Rorschach and Projective Methods, Abstract book,94-95.18th-July,2011. National Youth Olympics Memorial Center Tokyo,Japan.

〔図書〕（計 1 件）

1.舛田亮太　Ⅲ部 13 章 5 節　解離体験
パーソナリティ心理学ハンドブック pp392-pp398.日本パーソナリティ心理学会企画　二宮克美編全 770 頁（索引、奥付含む）福村出版

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）
〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
舛田　亮太（MASUDA　RYOTA）
久留米大学・医学部・助教
研究者番号：３０５４７０５５